

# 表紙 の 説明

## 躑躅ヶ崎館跡 （「風林火山」がはためく武田信玄の居館跡）について



表紙左上の平面図は航空レーザ計測システムのデータから樹木などのノイズを処理した地盤のランダム点群を格子で内挿して数値地形モデル(DTM)にし、陰陽図にしたものです。右上は同じ位置での空中写真です。図では連続する斜面でも周囲より低い陰値は青系統の寒色に、高い陽値は赤系統の暖色に、急勾配は暗く平坦な箇所は明るく配色して奥行き感を表現しています。現況の堀・沢だけでなく、連続する堀や土塁の遺構が見えてきます。下部の陰陽図はDTMの鳥瞰図に陰陽図を貼り付けています。こうすることで構造物や樹木のない地形の眺望を可視化しています。

### ■表紙画像のご提供先

「ヘリレーザによる陰陽図からみた躑躅ヶ崎館跡」

朝日航洋株式会社

〒350-1331 埼玉県川越市南台3-1-1

http://www.aeroasahi.co.jp Tel : 049-244-4817

陰陽図(特許第4379264号)

使用機器：LiDARシステム

(ALTM3100-AG4, Optech社製)、データ間隔約05m、高度約700m

躑躅ヶ崎館(武田氏館跡)は、甲府盆地の北部の相川が形成する扇状地の扇央に位置する甲斐源氏の盟主武田氏の居館跡です。現在、居館跡は国史跡に指定され、武田神社となっています(図-1)。

戦国時代を代表する武将武田信玄の居館でした。信玄の父信虎が永正16(1519)年に石和からこの地に移り、信虎、信玄、勝頼の三代にわたり武田氏の当主の館として使われてきました。

躑躅ヶ崎館を中心として北側の背後2.5kmの位置にある要害山には詰め城(要害山城)を築き、西には湯村山城、南には一条小山城(現在の甲府城)を配し、防備を固めていました。

武田勝頼は織田信長との長篠の戦に敗北後、織田軍の甲斐侵攻に備え、天正9(1581)年に新府城に居城を移しましたが、わずか3カ月で名門武田氏は滅亡しました。その後、甲斐は徳川家康の支配下となり、天正10(1582)年には再び甲斐の本拠地とし、新たな曲輪、天守台などが構築されました。

信虎築城当時は土塁と空堀で四囲された主郭のみでしたが、信玄の時代に西曲輪・北曲輪などが拡張され連郭式の縄張りになったようです(図-2)。現在、武田神社のある主郭部と西曲輪を併せて東西約280m、南北190mの敷地となっています。

主郭部は現在北半分が武田神社の拝殿・本殿となり当時の館中心

部で、南半部は東曲輪(現在は祈願者駐車場)と中曲輪(現在は三葉の松や茶屋)がありました。主郭部には北と東に虎口が見られ、とくに東は大手口でした。大手口には虎口の前面を遮断する土塁・空堀を設けた空間(馬出)を設けていました。この付近には図-3のように土塁と石垣が残っています。また、主郭部北西隅の天守台は徳川家康支配の頃に構築されたようです。

西曲輪は水堀・空堀と土塁によって本郭部と仕切られ、北と南にはそれぞれ虎口が残り、図-2でも明瞭に識別できます。

これ以外にも北側には味噌曲輪・稲荷曲輪・無名曲輪・御隠居曲輪などが構築され、味噌曲輪は図-2から明瞭に識別できます。南側には梅翁曲輪が構築されました(図-2)。往時には、これらの副郭と主郭から構成された躑躅ヶ崎館の周りには家臣団の屋敷が館を固めるように建てられ、南側一帯には格子状の道路に沿って古府中の城下町が開けていました。

館の東・西・南の三方に水堀を廻らせ(図-4)、北には空堀を穿ち、高さ9mで基底部の幅20mを超える大規模な土塁など、「甲州四郡の内に城郭を構えず、堀一重の御館に御座候」と『甲陽軍鑑』に記されているように、風林火山の旗の下、戦国の世を席卷した名将武田信玄の威信が伝わって来るような気がする館跡です。

(瀬戸島 政博)



図-1 武田神社の神橋と鳥居  
(筆者撮影)



図-2 躑躅ヶ崎館の陰陽図  
(朝日航洋(株)提供)



図-3 大手口付近の土塁と石垣  
(筆者撮影)



図-4 西側から望む躑躅ヶ崎館の水堀  
(筆者撮影)